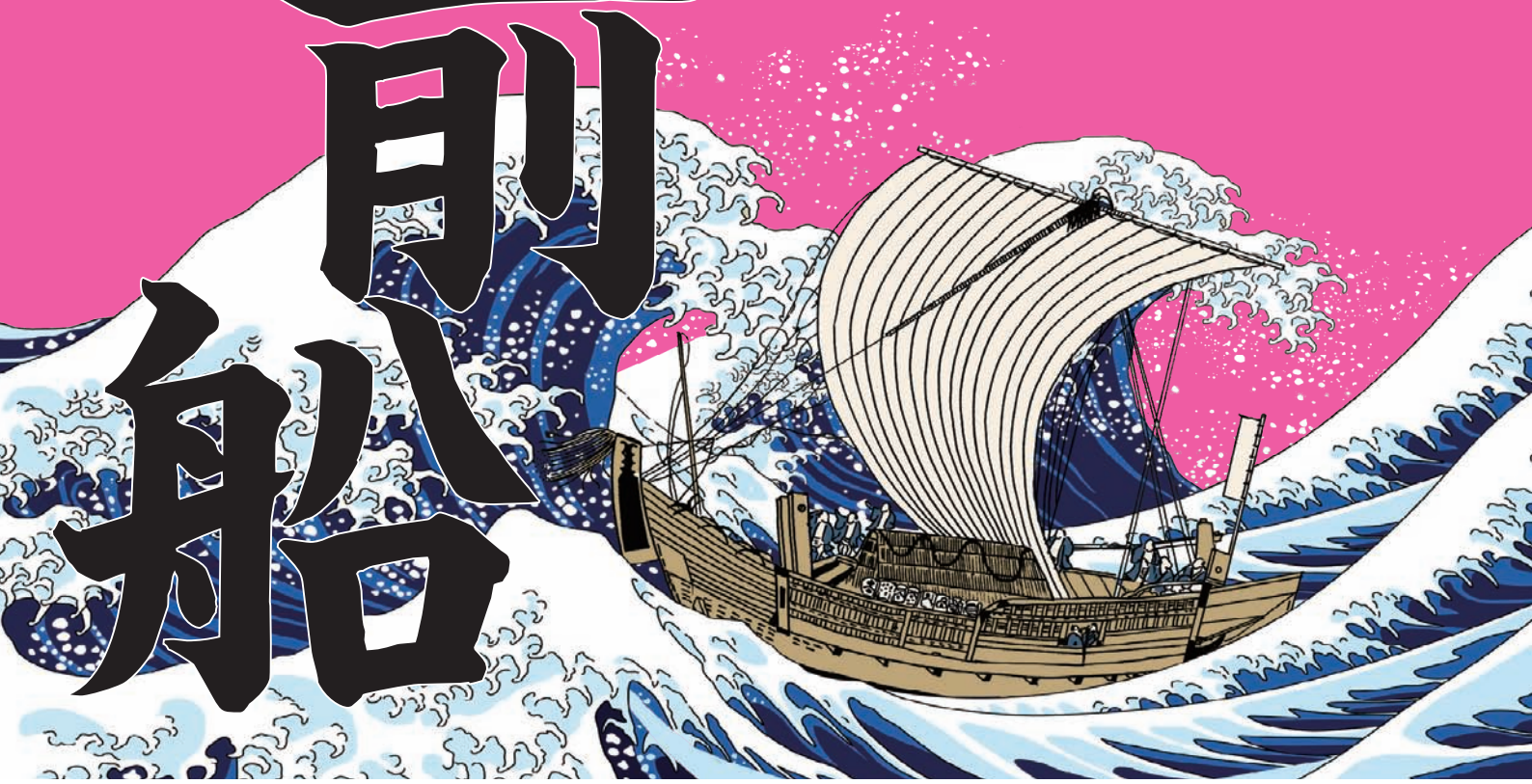
# 北前船

「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
北前船寄港地・船主集落」の物語



JAPAN HERITAGE

KITAMAE-BUNE

*Kitamae-bune*

北前船寄港地・船主集落

北海道函館市 / 北海道松前町 / 青森県鰺ヶ沢町
青森県深浦町 / 秋田県秋田市 / 山形県酒田市
新潟県新潟市 / 新潟県長岡市 / 石川県加賀市
福井県南越前町 / 福井県敦賀市

11

# 北前船

*Kitamae-bune*

北前船寄港地・船主集落


4 北前船とは
6 北前船の歴史
8 船乗りの生活と商品
10 北前船の商品と利益

12 北海道と北前船
14 北海道松前町
15 北海道函館市

16 風待ち港でも商品売買
18 青森県鰺ヶ沢町
19 青森県深浦町

20 船主を輩出した集落
22 石川県加賀市
23 福井県南越前町

24 北前船が寄りたくなる港
26 秋田県秋田市（土崎）
27 山形県酒田市
28 新潟県新潟市
29 新潟県長岡市（寺泊）
30 福井県敦賀市

31 一般公開されている北前船関連施設




JAPAN HERITAGE

「日本遺産」（Japan Heritage）は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーとして文化庁が認定するものです。
ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を，地域が主体となって総合的に整備・活用し，国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより，地域の活性化を図ることを目的としています。

# 一攫千金の夢物語「北前船」

江戸時代の中ごろから明治30年代にかけて、大量の荷物を積んで日本海を往来していた多くの船がありました。北前船と呼ばれる船です。「北前船とは何か」という定義には、研究者によってこまかい違いがありますが、共通項でくくってみると①大阪と北海道（江戸時代の地名では大坂と蝦夷地）を日本海回りで往復していた、②寄港地で積荷を売り、新たな仕入れもした、③帆船――と言えるようです。

江戸時代、荷物を積んで海を走る船を「回船」と言いました。全国にはさまざまな航路があり、特定の荷物を専門的に運ぶ回船もありました。

その中で最も船の数が多く、ひんぱんに航海していたのは、大阪から江戸へ向かった菱垣（ひがき）回船や樽（たる）回船です。何でも運ぶ菱垣回船がまず登場し、後に酒樽を運ぶことから始まった樽回船が現れます。冬は荒海となった日本海に対し、太平洋を走る菱垣回船や樽回船は一年中、何度も往復しました。

このほか、瀬戸内の塩を江戸に運んだ塩回船や、長崎で輸入される絹糸を大阪へ運び、帰りに昆布や干したアワビなど中国への輸出品を運んだ糸荷回船もあります。特に塩は、江戸の近辺（東京湾沿岸）での生産量は微々たるものでしたから、江戸から関東地方各地へも運ばれました。

徳川幕府のおひざ元である江戸は百万人もの人口があり、当時世界最大の都市だったのですが、衣類をはじめ生活必需品を十分には生産できませんでした。だから関西から大量の物資を運んだのです。しかし、帰り船に積む荷物はありません。寄港地も少なく、菱垣回船も樽回船も江戸までの片道運賃で稼ぐしかありませんでした。

これに対して北前船は、寄港地で安いと思う品物があれば買い、船の荷物で高く売れる物があればそこで売るという「商売」をしながら北海道へ往復していた船なのです。これを「買積（かいづみ）船」と言い、ほかの航路の回船との最も違う大きな特徴です。

北前船には「千石船」というイメージもあります。でも、これは「米を1千石積むことができる大きさ」という意味です。重さで換算すると、150トンの米です。実際には5百石積み程度の中型船も多かったのですが、北前船史上最大の船は、2400石積みもありました。

船の形としては「ベザイ船」ばかりです。漢字では「弁才」とか「弁財」と書きます。白く、巨大な帆1枚で帆走する和船を想像してもらえばいいでしょう。

弁才船は、瀬戸内海で発達した船型です。江戸中期までは伊勢の伊勢船や、東北・北陸地方の北国船、羽賀瀬船など、地方ごとに特徴的な船型がありました。北前船が弁才船ばかりになったのは、船体が堅牢なのに加え、現在の船と同じように鋭い船首で波を切り裂き、西洋のヨットほどではありませんが、逆風でも進むことができる、すぐれた帆走性能があったからです。

千石船で大阪と北海道を1往復すると、北前船は千両もの利益を得ることができました。今なら6千万円から1億円と考えていいでしょう。

見習いの船乗りから始まって船頭になり、お金を貯めて、自分の船を持つと大金持ちになれたのです。武士を頂点とした身分制度のあった時代、自分の才覚と努力で、そんなチャンスをつかむことのできる北前船は庶民の夢物語でもありました。実は北前船には、数多くの遭難記録があります。それでも「北前船の夢」を追う船乗りが、絶えることはありませんでした。

北前船は、さまざまな文化も運びました。例えば食文化。北海道の昆布によって、西日本で現在の和食の基礎ができました。

民謡もあります。九州が発祥の「ハイヤ節」は、新潟県の「佐渡おけさ」となり、さらに青森県の「津軽アイヤ節」に姿を変えました。島根県の「出雲節」が、「秋田船方節」になったのも、北前船の船乗りが覚え伝えて、それぞれの地域に定着した結果です。

日本海沿岸各地に残る「裂織（さきおり）」は、古着を裂いて横糸にした織物です。しなやかで、丈夫な木綿は江戸時代の初め、今の大阪府で綿花栽培が始まり、日本人に「衣料革命」をもたらしましたが、寒い地方では綿花が育ちません。裂織は、北前船が運んだ古着など貴重な木綿のリサイクル技術です。そこから派生した「刺し子」は、今でも各地に伝承されています。

右／小浜の写真師・井田米蔵が、明治末期から大正期にかけて撮影した北前船（8P、10Pの写真も同様）

左／日本海の荒波

# 北前船の歴史

北前船が登場する以前、北海道の産物を一手に取り扱っていたのは、戦国時代の末期から松前に進出していた近江商人でした。彼らは商品を敦賀で陸揚げし、琵琶湖を経由して大阪へ運んで売りさばきました。

自前の船を持つ近江商人もいましたが、多くは共同で船を仕立て、船乗りを雇いました。その多くは、北陸の船乗りです。後にこの中から自分の船を得て、北海道の産物を大阪で売る人たちが現れます。それが北前船ですが、そのきっかけとして、航路の整備が見逃せません。

幕府は寛文12年（1672）、江戸の商人・河村瑞賢に、最上川流域にあった15万石の天領（幕府の領地）の米を、河口の酒田から江戸まで運ぶ航路の整備を命じました。酒田から江戸までは、津軽海峡を通過して太平洋岸を航行した「東回り」の方が近いのですが、とても危険な海域が続きます。そこで瑞賢は佐渡の小木、下関、大阪など10か所を正式寄港地と定め、その他の港に入港した際も無税とするよう沿岸の各藩に通知し、超長距離の「西回り航路」を整備しました。

この航路の安全性を知った津軽、秋田など日本海側の諸藩も大阪まで直航で、年貢米を運ぶようになります。

近江商人の敦賀―北海道航路と、瑞賢の西回り航路のうち酒田―大阪航路が結びついたのが「北前船の航路」と言えます。けれど、すぐに北前船が動き始めたわけではありません。

敦賀で陸揚げする米は減りましたが、近江商人が運ぶ北海道の産物は逆に増え続けました。江戸時代になって全国的に開田が進み、人々の暮らしが豊かになって、昆布や身欠きニシンなどの需要が急速に増えたからです。昆布については、江戸時代になって内浦湾の真昆布の生産量が急増し、京阪神へ大量に供給できるようになったという事情もあります。

そして綿花、イグサ、藍などの換金作物の栽培が瀬戸内一帯で広がるにつれ、肥料の需要が高まりました。ところが九十九里浜（千葉県）など、それまで魚肥となるイワシの大量供給地でも水田開発が進み、地元需要のために西日本へは運ばれなくなりました。イワシに代わる魚肥となったのが、ニシンです。18世紀に入ると、ニシンを煮て魚油を絞った残り粕を肥料にする技術が生まれ、大量に供給できるようになりました。

近江商人に雇われていた北陸の船頭たちは「同じことをやれば大もうけできる」と考えるようになりました。そのために①自前の船を持つ、②近江商人以外の江差や函館の商人と取引する、③大阪の商品問屋と直接取引をする――などの努力を経て、彼らは近江商人から独立しました。

これが北前船です。18世紀中ごろのことでした。

18世紀末、かなりの強風でも破れない丈夫な帆布（松右衛門帆）が発明されて、大阪―北海道を年に2往復できるようになりました。また北陸だけでなく、各地に「北前船商売」をする船主が登場し、近・中距離をこまめに走らせ始めます。さらに19世紀になって幕府が東蝦夷地（内浦湾から東の北海道）を直轄地としたことから、その産物を江戸へ運ぶ商人も出てきました。こうして北前船は多様になって行ったのです。

実は、北前船の最盛期は明治になってからです。江戸時代は松前藩が松前、江差、函館しか回船の入港を許さなかったのですが、明治3年からどこの港でも交易できるようになったからです。また、西洋式帆船のように複数の帆を装着するなど、船の改良も進んだことも理由のひとつです。

しかし、明治20年代になると、少しずつ北前船の利益は減り始めました。

通信手段が手紙しかなかった時代は、地域によってばらつきがある商品価格を知ることができたのは、実際に各地を訪れる北前船の船頭ぐらいだったので、その「差額」を利用して大きな利益を得ることができたのです。ところが、電信という文明開化の通信手段が次第に普及し、価格情報が北前船の独占ではなくなって来ました。

そして明治24年、東京―青森間の東北本線が全通しました。津軽海峡さえ越えれば、北海道と東京が陸路で直結することになったのです。また、荷物を大量に、しかも安全に輸送できる汽船が次第に普及し始めました。

明治30年代になると北前船はどんどん姿を消し、日露戦争によって北海道周辺の海が危険になったことが、北前船の歴史にピリオドを打ちました。

江戸時代に西回り航路の起点として整備された酒田湊。最上川河口を一望できる日和山公園には西回り航路を整備し、北前船と酒田湊発展の礎を 作った河村瑞賢像や航路の安全を祈願して文化 10 年（1813 年）に建立した常夜灯があり、今でも日本海を見守っています

# 船乗りの組織とマネジメント

旧暦2月、現在の暦で3月になると北前船が出帆する季節です。多くの船は大阪を出ますが、船主によっては秋田、酒田、新潟などそれぞれの地元で冬囲いし、「上り一番船」としてまず大阪へ向かい、改めて北海道を目指す船もありました。

北海道に着くのは4月末〜5月です。北海道の産物を積み込んで、再び大阪を目指して出港するのは8月ごろになります。多くの北前船主がいた北陸の例ですが、台風シーズンの前に下関から瀬戸内海に入り、大阪・淀川の支流に船を係留し、船頭以外の船乗りたちは、徒歩で帰郷しました。

帰郷した船乗りたちは、毎日のように船主の家で掃除、雪除け、もちつきなど、頼まれれば何でもやりました。でも10日ぐらいは休みをもらい、湯治に行くのが楽しみだったそうです。

一方、大阪に残った船頭は、売れ残った積荷があれば売りさばき、翌年春に積み込む商品を仕入れる大事な役目がありました。故郷に帰れるのは、正月の前後ぐらいだったそうです。

米を1千石積める北前船には、通常11〜13人が乗り組んでいました。

最高責任者は、船頭です。船の運航から商品の売買、乗員の統率まですべてを統括していました。

その下には、「三役」と呼ばれる重要ポストがありました。

まず、現在の航海士にあたる「表司」です。出帆すれば昼夜を問わず進路を見定め、目的地までの航路を指示します。次に、帆や舵の操作、その他すべての甲板上の作業を指揮する「親仁」。水夫長ですね。

「三役」ではもう1人、事務長である「知工」が重要です。積み荷の受け渡しを指示し、帳簿を付け、船頭と相談してお金の出し入れをしました。北前船は大金が動く取引も多く、責任の重い仕事でした。

一般船員は、水主と言います。この中で表司を補佐する片表、舵を動かす楫子、碇を上げ下げする「碇捌」などの職務は、ベテランの役目でした。一番下が、調理担当の炊です。朝は最も早く起きて飯を炊き、寄港しても船の留守番をさせられました。

船乗りのスタートは炊です。普通は14〜15歳で雇われます。航海を重ねて楫子、碇捌、片表などに成長し、やがて三役、船頭となるのですが、三役や船頭の年齢は40代、50代が多く、炊からは30年もかかるのが普通でした。

船頭は、船主に雇われた「沖船頭」と、自分が船主の「直乗船頭」に区別されます。北前船の船頭は取引の責任者でもあるので、人並み以上の「読み書き算盤」の能力が求められました。それで、知工がしばしば船頭に昇格しました。航海は、しっかりした表司と親仁がいれば間に合ったからです。

中には30代で沖船頭になる人もいれば、50歳を過ぎても水主のままという人もいました。船乗りの出世は、実力本位だったのですね。

千石積みの弁才船を1艘造るには、千両かかるのが相場でした。中古船でも5百両はしました。しかし沖船頭から独立して、船主となった人は数え切れません。そんな金をためられるほど北前船の船頭の給料が高かったのかと言うと、そうではありません。

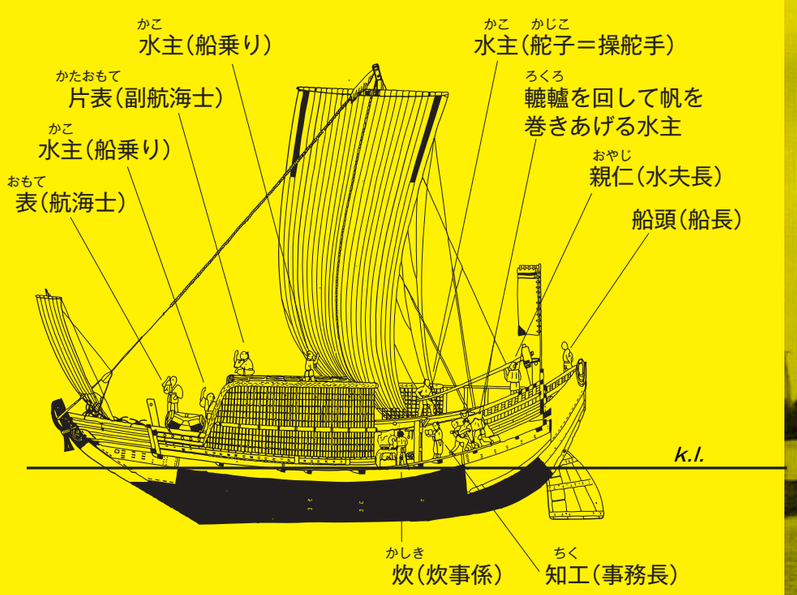
大阪―江戸を往復した菱垣回船や樽回船の船頭は、年に30〜40両の給料がありました。当時の花形職業だった大工の棟梁は、年収が25両ほどでしたから、最も高給の職業でした。

これに対して北前船の船頭は、1航海の給料がたった2、3両でした。しかし船頭には、船主の積み荷の1割程度、自分の商品を積むことが許されていました。千石積みの北前船の利益は千両にもなりましたから、単純に計算すると、船頭は1航海で百両を稼ぐことができたのです。この売買を「帆待ち稼ぎ」と言います。他の航路では許されませんでしたが、北前船では早くから認められていました。

三役以下の乗員にも、「切出」というボーナスがありました。船主が、売上高のうち5〜10%を船乗りに分配したのです。こうすると船乗りたちは船主の荷物を大切に扱い、船頭が自分の荷物ばかりを優先させないよう見張る役目も果たしてくれます。よくできた「社員管理術」と言えますね。

こうして、船頭になるまでにも貯金できる仕組みがあったので、遭難の危険があっても北前船に乗りたがる人は絶えませんでした。身分制度が厳しかった江戸時代、北前船は、荒海へ乗り出す勇気と、商売の才覚さえあれば、普通の庶民が大富豪になれる「夢物語」だったのです。

北前型弁才船・乗組員の配置
出所：（財）日本海事科学振興財団 発行『北前船』より



# 動く総合商社「北前船」

北前船は、大阪―北海道の往復が基本的な航路です。北海道に着くまでにあちこちの寄港地で、売れそうな物は何でも買い、帰りにはニシン、昆布などを満載して瀬戸内海を目指すのが通常でした。それは北海道唯一の大名領、松前藩の特殊事情にもよります。

稲を育てられなかった江戸時代の北海道では、主食の米はもちろん、稲わらもないのでナワ、ワラジをはじめ、ほとんどの生活物資を本州から手に入れなければなりませんでした。松前藩の人々はその資金を、アイヌの人たちが獲る鮭などの海産物を物々交換で手に入れて、松前の近江商人に売って得ていました。つまり松前藩は、最初から、交易で成り立っていた大名領だったのです。

米は、物々交換でそのおいしさを知ったアイヌの人々も欲しがる商品でした。大阪の米市場には、日本海沿岸から西日本全域の大名の年貢米が集まりました。北前船は大阪を出帆する時に米を仕入れましたが、敦賀や新潟、酒田などでも大名の年貢米は売買されました。その相場を見て、安い米を買い足し、逆に高ければ積荷の米を売りました。

もうひとつ、瀬戸内の塩は、日本海へ出ればどこででも売れました。瀬戸内に塩田が広がった理由を、よく「遠浅の浜辺が多く、晴れた日も多いから」と説明されますが、もうひとつ、北前船の役割が見逃せません。北前船によって販路が広がったから、安心して生産量を増やすことができたのです。

また北海道では、それまで乾燥させるしか保存方法のなかった鮭を、塩鮭に加工できるようにもなりました。そして19世紀、北海道の東半分を幕府が直轄地としてから江戸へ直航する船が現れ、江戸っ子が塩鮭で朝飯を食べられるようになりました。

江戸初期、河内（かわち）（大阪府）で綿の本格的な栽培が始まり、糸をつむいで織った木綿は、それまでの麻などの布地に比べて柔軟性があり、吸湿性にもすぐれ、日本の衣類に革命を起こしました。しかし綿は熱帯性の植物で、北国では栽培できません。だから木綿は古着でも、端切れでも大歓迎され、北前船の必須商品となりました。

江戸時代の鉄の8割は、中国山地で生産されました。砂鉄を原料にした「たたら製鉄」です。北前船が運んだ鉄は鍬（くわ）や鎌（かま）などの農具、鍋（なべ）、飯を炊く釜などの生活用具に加工され、人々の暮らしを支えました。また各地に刃物産業を興すことにもなりました。

紙も、北前船が原料のコウゾやミツマタなどを運んだおかげで、各地で生産され、重要な商品となりました。

石も、大事な積み荷です。船を安定させるためもバラスト（重石）として積み込まれました。北海道交易が近江商人だけだった時代は、福井県坂井市の三国で積み込む笏谷石（しゃくだにいし）ばかりでしたが、大阪を出発する北前船の時代になると、瀬戸内各地で積み込む御影石が主流になりました。

このほか、陶磁器、漆器、ロウソクなどの生活用具から、お菓子や人形まで、北海道への下り船ではありとあらゆる物を運んだと言えます。

そういう意味で、北前船は「動く総合商社」だったのです。

しかし、千石船の1航海で千両（今なら6千万円～1億円）という北前船の利益の中で、「下り船」は百両ほどです。残り9百両の利益を生んだのは、大阪へ戻る上り船です。

最大の商品は、ニシンでした。春になると海の色が変わるほど海岸に押し寄せた北海道のニシンは、煮て魚油を絞り、残ったニシン粕を発酵させて肥料にします。これが仕入れ値の5倍、時には10倍でも売れたのです。北前船の大もうけの秘密は、ニシンだったと言ってもかまいません。

上り船には干したアワビ、ナマコ、フカヒレも大量に積み込まれました。この3品は俵に詰めて運ばれたので俵物と呼ばれ、長崎から中国への輸出品になりました。

中国へは昆布も大量に輸出されました。中国大陸の内陸部に多かったバセドウ病という病気に効く薬草として、甲状腺ホルモンの異常が原因の病気に効く薬でした。

古くから日本では昆布を食べていましたが、北前船が大量に運んだおかげで、和食の基本である昆布出汁が庶民の味となり、富山県の昆布巻きかまぼこ、各地のおぼろ昆布、そしてアナゴの昆布巻きのような料理も広まったのです。

北前船の恩恵は、さまざまな形で現在まで及んでいるのですね。

右／松前城

# 北海道と北前船

## 北海道松前町
## 北海道函館市

北前船の折り返し点は、北海道の港です。松前藩の人々の食糧、生活物資を運び、帰りにはニシン、昆布などを積んで、北前船が巨万の富を得たことは、前に紹介しました。でもこれは、北前船側の視点です。逆に松前藩の方にも、大きな恩恵がありました。

松前藩は松前、江差、函館の3カ所を交易港と定め、それ以外には本州から来る回船の寄港を認めませんでした。藩の領地であり、和人（アイヌ以外の、本土から移り住んだ人々）の居住地域がこの範囲だったからです。が、それに加えて、役人が監視できない場所では税金が徴収できないという理由もありました。

松前藩では出港税を取っていて、北前船の時代にはこの税収が藩財政を支える大きな柱でしたから、すべての回船を監視するためにも港を限定したのです。入港税を取る藩もあり、多くの港で、そこで商売をすれば移出入税（移出は取引税、移入は関税と考えてください）を徴収するのが普通でした。北前船の寄港地では、そこを管理する大名にも多額の収入をもたらしたのです。

ところで、松前藩の出港税は、船の大きさに応じて税額が決まりました。それが次第に、北前船の形を変えることになります。

北海道松前町

北海道函館市

函館漁港船入澗防波堤灯台

# 北前船を見守る山

函館から吹く風が、函館に繁盛を連れてくる
船乗りが夢みた100万ドル、今は夜の輝きに。

*Hakodate-shi*

## 北海道 函館市

江戸時代、松前、江差と並ぶ松前藩の交易港だった箱館。当初は北前船にとっては魅力に乏しかったのが、東蝦夷地の幕府直轄によって一変します。東蝦夷地のアイヌ交易により、その産物が箱館経由で流通すると、北前船の来航が急増したのです。箱館奉行によって進められた市街地整備は北前船の富が加わって加速しましたが、その中心が、豪商・高田屋嘉兵衛でした。

北前船の男たちが出航前に、日和を見た場所として知られる函館山。山頂へのアクセスはロープウェイで、函館市内の昼、夜、様々な表情が楽しめます。函館山からの眺望は「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」に3つ星として掲載されていて、植物や渡り鳥が分布・生息する自然豊かな場所としても知られています。かつて函館山周辺には4か所の砲台が建設され、函館港、函館湾を守った軍事要塞などの歴史スポットも見どころ。かつて、船乗りたちは、この海の彼方にどんな夢を描いていたのでしょう。

**①高田屋嘉兵衛最中**　江戸時代函館繁栄の基礎を築いた豪商高田屋嘉兵衛の北前船を最中にしています。香ばしい皮と和三盆糖を加えた上品なあんの最中です。

**②函缶**　函館モチーフを散りばめた函缶。好きな商品を詰めて封缶すれば、世界でひとつだけのお土産に。

**③ティーショップタ日**　明治18年に建てられた検疫所跡を活用した海を臨む日本茶カフェ。店名の通り、絶景の夕日が名物。オレンジから青に変わる空をお見逃しなく。（写真提供／函館市公式観光情報サイト「はこぶら」）

**④箱館奉行所跡**　幕末の北辺警備と対外折衝の重責を担った箱館奉行所。箱館戦争の２年後に解体されましたが、往時の建築を駆使して忠実に復元。



# 船が運んだ京の桜

その昔、京や江戸を偲んで植えた桜の木
満開の姿を見りゃ、あなたを忘れる暇もない。

*Matsumae-chou*

## 北海道 松前町

春、海の色を変えるほどニシンの大群が押し寄せた松前。17世紀、松前に出店を開いた近江商人は、松前のニシン、昆布、干しあわびなどの産物を京都、大阪などの市場で売りさばき、代わりに呉服物、米、味噌などを松前に運んで商いをしました。物資だけでなく運んだのは京都の文化も。寺院の庭園樹、桜、椿などの多くはこの頃、松前に運ばれたと言われています。

松前が桜の名所となったのは、松前藩の時代。当時の商人や京から嫁いできた藩主の奥方が故郷を懐かしんで桜の木を植えたのが始まりと言われています。北海道で唯一の日本式の城である松前城を中心に作られた松前公園は、「さくらの名所100選」にも選ばれており、津軽海峡を眺めながらの桜は圧巻です。4月下旬から約1か月間、早咲き、中咲き、遅咲きと「時差開花」する、色も姿も様々な桜が見事に咲き誇ります。淡い黄色のウコン桜など珍しい品種も。幻想的な夜桜のライトアップはいつの時代も、見る者の胸をはらはらと、ときめかせます。

**①温泉旅館「矢野」**　アクティブな若女将が営む、松前町一番の老舗旅館。松前藩主料理と温泉が楽しめます。

**②松前藩屋敷**　江戸時代の町並みを復元した観光施設。当時の暮らしぶりを体験する事ができます。

**③北前食堂**　道の駅「北前船　松前」内にあるこちらでは、松前港で揚がった新鮮な魚介を豪快にいただける海鮮丼のメニューが充実。

**④松前漬**　松前藩が発祥の郷土料理で、数の子、昆布、スルメを醤油たれに漬け込んだ珍味「松前漬」。

# 風待ち港でも商品売買

## 青森県鰺ヶ沢町
## 青森県深浦町

日本海沿岸には、風雨が激しくなった時に逃げ込む小さな湾や入江がたくさんありました。これを「風待ち港」と言います。

例えば島根半島の宇龍と鷺浦（島根県出雲市）、兵庫県但馬地方の香住、今子浦、柴山（香美町）、能登半島の福浦（石川県志賀町）、庄内藩の外港でもあった加茂（山形県鶴岡市）、芭蕉が「奥の細道」で立ち寄った象潟（港の名は塩越＝秋田県にかほ市）、津軽の深浦（青森県深浦町）などは、現代人には「小さな漁港」程度の広さに思えるでしょうが、外海の荒波を防いでくれる地形で、北前船にはありがたい港でした。このような場所にも回船問屋があり、北前船と取引するだけで立派に商売が成り立ちました。

風待ち港から始まって、大きな交易港となった例もあります。広島県呉市の大崎下島東岸に位置する御手洗（みたらい）です。すぐ目の前に小島があり、四方の風を防いでくれる御手洗が絶好の風待ち港であることを発見したのは、幕府の米を積んで大阪を目指した西回り航路の船頭たちでした。御手洗は次第に整備され、北前船の時代が始まると、広島藩で最もにぎわう「西国無双の港」と言われました。

青森県鰺ヶ沢町

青森県深浦町

千畳敷海岸（深浦町）。1792年の地震により隆起して出来た岩床の海岸

# 船乗りの祈祷寺

風まかせ帆まかせ、時に嵐の船上で
船乗りが命がけの願かけ込めたこの「まげ」に。

*Fukaura-machi*

## 青森県 深浦町

深浦は津軽で一番の「風待ち港」として栄えた港でした。行合崎（ゆきあいざき）は細長く突き出た岬で、その沖で北前船が行き交うことからこの名がつけられました。行合岬と入前崎に囲まれた深浦の歴史を紹介しているのが資料館「風待ち館」で、北前船の模型や船絵馬、古い海路図などが展示されています。町歩きの拠点として、深浦に着いたらまず立ち寄りたいスポットです。

円覚寺寺宝館に奉納された70枚の船絵馬や「髷額（まげがく）」は28点にも及び、国内髄一の数を誇ります。「髷額」は、荒天のため遭難の危機に瀕した船乗りたちがちょんまげを切り落とし、ざんばら頭になって一心不乱に祈り生還した後、そのお礼に奉納したもの。明治になって、北海道へ向かう北陸や能登の船は深浦に入港するとまず、円覚寺に参拝してから、自宅に無事を知らせる電報を打ちました。太宰治は小説「津軽」執筆のために深浦を訪れ、円覚寺の薬師堂に参拝し、深浦を「完成されている町」と表現しています。

①**白神硝子**　吹き抜けのある工房では、作家たちの制作風景が見学でき、グラスやピアスなどの作品作りもできます。

②**不老ふ死温泉**　日本海に突き出た黄金崎の突端に位置し、海に面した、ひょうたん型の露天風呂で知られる温泉。鉄分を含んだ茶褐色のお湯。名前の由来は、宿の先代が好んで使っていた言葉から。

③④**円覚寺**　坂上田村麻呂が蝦夷東征の際、十一面観音を安置したことに始まるこの寺は、海上の安全を願う船乗りたちの信仰を集めました。



# 北の京菓子

田舎もの？いえいえ、生まれは京の都です。
「くじら」の味はしないところに味があります。

*Gigasawa-machi*

## 青森県 鰺ヶ沢町

津軽藩の海の玄関としてにぎわった鰺ヶ沢。北陸や瀬戸内海、大阪からの船が日用品、京や大阪の文化などを運び、また、藩米を大阪に積み出す御用港として栄えました。２００年以上前に描かれた「鰺ヶ沢町絵図」を見ると、現在の町の姿と比べてほとんど変わりなく、絵図を片手に北前船ゆかりの街歩きが楽しめる博物館のような街です。

北前船で伝わった食文化のひとつが「鯨餅」。餅米とうるち米を粉にしたものに、砂糖を混ぜて蒸し上げた、モチモチとした食感で上品な味わいの餅菓子です。ちなみに、鯨の肉は入っていませんのでご安心を。白と黒の二層になった断面が、鯨の皮に似ていることからその名前がついたとか。京都発祥のお菓子が青森や山形に伝えられ、鰺ヶ沢では「鯨餅」、その他の地域では「久持良餅」「くぢら餅」などと呼ばれています。日本海の荒波が印象的な包装紙のデザインは、山並みの迫る海岸線と後方にそびえる岩木山を同時に眺めることができる名所、鰺ヶ沢港からの風景をモチーフにしています。

①**わさお**　「ブサかわ犬」（不細工だけどかわいい犬）として一躍有名になった秋田犬（推定10歳）。現在の姿は公式ツイッターでチェック。

② **polepole**　「ポレポレ」とはスワヒリ語で「のんびりと」の意味。陶芸家のご夫婦から生まれる、ウキウキと楽しく元気がわいてくる器たち。

③**鰺ヶ沢温泉水軍の宿**　安東水軍をしのばせる建屋と日本海の旬の食事が自慢のお宿。保温保湿に優れたお湯は、「天然のタラソテラピー」として評判。

④**日和山の碑**　７世紀頃、阿部比羅夫が渡嶋に渡るため、日和を見たという伝説が残る山です。

# 船主を輩出した集落

## 石川県加賀市
## 福井県南越前町

大正5年（1916）発行の雑誌『生活』（博文館）に、「日本一の富豪村」と紹介されている場所があります。江戸時代は加賀百万石の分家である大聖寺藩領、今は石川県加賀市の橋立と瀬越です。

瀬越の大家七平、広海二三郎は明治になって蒸気船を導入し、北前船から近代海運業へと飛躍しました。

橋立でも弘化2年（1845）、大聖寺藩に1万両（今なら10億円）を献金した久保彦兵衛をはじめ、千両以上出した家が軒を連ねていました。彼らはすべて、北前船主です。

橋立も瀬越も、多数の千石船が碇泊できる港はありません。船の基地は大阪で、寄港地ではなく、船主や船頭が多く居住した「船主集落」といえます。橋立には船主の屋敷が14軒現存し、中心部の120戸は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

「北前船の里資料館」になっている7代目酒谷長兵衛の屋敷は、とても豪壮ですが、それでも橋立の北前船主としては中の上クラスだったそうです。久保彦兵衛家には、藩主をお迎えする豪華な座敷があって、それは今、金沢市の武家屋敷、野村家に移築・保存されています。

河野浦（福井県南越前町）は耕作地がほとんどなく、古くから船乗りを輩出した村です。その中から幕末に中村三郎右衛門、右近権左衛門が北前船で急成長しました。中村家は非公開ですが、公開されている右近家の本宅に入ると、ヒノキやケヤキの柱、梁の太さに驚かされます。裏山には、昭和10年建築の別荘があります。1階はスペイン風、2階はスイス風にデザインされた、今もモダンな洋館です。

また、佐渡市の宿根木も昔の姿そのままに残る船主集落です。小さな入江にびっしりと、軒を接するように家が建て込んでいます。敷地そのままに建てた三角形の家があるほどの狭い土地で、120軒、6百人もが生活できました。幕末、宿根木の回船が長州（山口県）沖で海賊に襲われ、2千両も奪われた事件からも、宿根木の船主たちの繁栄が想像できます。

石川県加賀市

福井県南越前町

橋立保存地区。加賀南部で生産された赤瓦が残る屋根並み（加賀市提供・無断転載禁止）

# 恋愛成就の九谷焼

浴衣娘と船頭の恋が山中節に詠われています。「夕べ習うた山中節も今朝は別れの唄となる」。

*Kaga-shi*

## 石川県 加賀市

北前船で巨万の財を築いた船主が多く、「日本一の富豪村」と言われたのが、石川県加賀市にある瀬越と橋立、２つの集落です。近くの山中温泉には北前船の船乗り衆も湯治に訪れ、彼らが航海中に覚えた民謡「松前追分」を湯の中で唄うのを聞いた浴衣娘（ユカタベ）さんが真似たのが山中節の起源だという説もあります。船頭衆と浴衣娘の恋を詠んだ歌詞も残ります。

江戸時代、湯座屋には16歳前後の浴衣娘と呼ばれるご当地アイドルが町を華やかに彩っていました。彼女たちは浴客を旅館から総湯まで案内し、彼らの入浴中その浴衣をあずかるのが仕事でした。何人の浴衣をあずかっても、一枚一枚間違いなくお客に返すというのが浴衣娘の技でもありました。16歳の女の子のことを山中温泉では、４×４（シシ）＝16から、「シシ」と呼びます。なので、ゆかたべ人形は片面が少女、もう片面は獅子の顔をしています。

①**北前船の里資料館**　珍しい船絵馬や、引札（回船問屋が配った広告チラシ）などが展示され、北前船主の豪勢な暮らしぶりを伝えています。

②**山中温泉**　松尾芭蕉が「身体の芯までしみわたり、身も心もうるおす」と絶賛した日本三大名湯のひとつ。北前船の船乗り衆も湯治に訪れ、旅の疲れを癒しました。

③**加賀橋立の町並み**　北前船の船主の邸宅が立ち並ぶ橋立。笏谷石の石垣と真っ赤な加賀赤瓦で統一された美しい町並みが広がります。

④**石川県九谷焼美術館**　「古九谷の杜親水公園」の一角に建つ、九谷焼をテーマにした美術館です。古九谷をはじめ、およそ360年もの歴史を持つ九谷焼の魅力を紹介しています。（写真提供：石川県観光連盟）



# 北前イタリアン

河野の日本海の幸がナポリの味に。屋敷の扉を叩いてみれば文明開化の香がする。

*Minami Echizen-chou*

## 福井県 南越前町

その昔、越前国府の武生と、京への物資輸送の拠点だった敦賀を結ぶ海運で栄えた旧河野村。越前海岸の南端、敦賀湾のほぼ入り口に位置する、「海とともに生きてきた村」でした。「河野北前船主通り」にはその名の通り、北陸五大船主の１人、右近家の豪邸や国重要文化財「中村家住宅」など、かつて栄華を誇った船主たちの屋敷が並びます。

築１００年以上の「北前船主の館右近家」をリノベーションしたレストラン「畝来」（ウラ）。海近くのロケーションを生かし、越前河野の海で獲れたイキの良い魚介を使ったお料理が舌をうならせます。一見、硬派なカニやアンコウなどの食材がシェフの腕にかかると、陽気で小洒落たイタリアンに変身します。

ソースやドレッシング、パンまで手作りのこだわりよう。東京で修行したパティシエが手がけるスイーツやサイフォン抽出のコーヒーなど、最後まで期待を裏切りません。海近くの「北前イタリアン」はとっても男前な仕事をしています。

①**「畝来」のデザートメニュー**　前菜、スープ、４種類のメインから選ぶコース仕立て。おススメは福井名産、肉厚で香り高い香福茸（こうふくだけ）が豪快に乗った魚介のスープリゾット。

②**和紙箱「和紙の石」**　一枚一枚、丁寧に漉き上げられた和紙を優しい風合いの箱に。積み重ねると石ころのオブジェのよう。

③**右近家住宅**　敷地内に本宅と３棟の内蔵、４棟の外蔵が建ち本宅の内部はケヤキやヒノキ、アメリカのマツを使うなど豪勢な造りです。

④**河野北前船主通り**　右近家、中村家の屋敷を中心とした200mほど続く船主集落。北前船が栄えた当時にタイムスリップするような感覚を味わえます。

# 北前船が寄りたくなる港

## 秋田県秋田市（土崎）　山形県酒田市
## 新潟県新潟市　新潟県長岡市（寺泊）　福井県敦賀市

九頭竜川河口の三国（福井県坂井市）、小矢部川河口の伏木（富山県高岡市）、神通川河口の東岩瀬と白岩川河口の水橋（富山市）、江戸時代は信濃川と阿賀野川の河口が一緒だった新潟（新潟市）、最上川河口の酒田（山形県）、子吉川河口の本荘（秋田県由利本荘市）、雄物川河口の土崎（秋田市）、米代川河口の能代（秋田県能代市）と、日本海に注ぐ大河の河口には、川の流域から物資が集散する港がありました。

藩の外港として物資の集散地となった浜田（島根県浜田市）、賀露（鳥取市）、宮津（京都府宮津市）、安宅（石川県小松市）、鰺ヶ沢（同鰺ヶ沢町）、それに近江商人の荷物の中継地である敦賀（福井県敦賀市）なども、北前船が「立ち寄りたい港」でした。

これらの大きな港には回船問屋が立ち並び、北前船との取引で栄えました。それだけはなく、船頭が泊まる船宿、一般船員が泊まる小宿もそれぞれに地域の小売り商人との仲介役を果たしました。さらに、大量の荷物を一時的に預かる倉庫業の商人もいましたし、船乗りを遊ばせる遊郭も、何カ月も航海する北前船の船乗りにとっては魅力でした。こうして、北前船の寄港地は大きな都市に発展していったのです。

秋田県秋田市（土崎）

山形県酒田市

新潟県新潟市

新潟県長岡市（寺泊）


福井県敦賀市

鶴舞園（本間美術館）は、本間家４代光道が、鳥海山を借景に北前船で運ばれた各地の銘石で作った池泉回遊式庭園

# 秋田美人をつくる酒

べっぴんさんをつくる秋田の酒蔵は商い上手
飽きっぽいあの娘も惚れ込む、酵母のささやき。

*Akita-shi*

## 秋田県 秋田市

秋田杉や米など、特産品を運び出す港として栄えた土崎。米以外にも多くの産物が集まるこの港は、北前船を呼び寄せました。19世紀初期、土崎へ入港する船は年間6百艘を超え、12軒の回船問屋がにぎわいました。土崎から出る荷物は、農産物や海産物に秋田杉、これに対して入ってきたのは、自給できない木綿、古着、塩、砂糖、紙などでした。

嘉永5年（1852）、幕末動乱の時期に創業した秋田を代表する新政酒造。酒蔵の名前の由来は、「厚き徳をもって新しい政（まつりごと）をなす」から。日本酒を作るのに必要な酵母でも、「6号酵母」の魅力をダイレクトに表現することを目指して醸造されたラインがこの「NO.6」。中でも最上級モデルのX-Typeは、「eXcellent」を意味するこの酒蔵を代表するモデルです。磨きこまれた米を用いて、より品格ある仕上がりが特徴。6号酵母の清楚にして力強い存在感を最もビビッドに感じ取れる1本です。

①**秋田県立美術館**　目玉は、世界的な画家、藤田嗣治が昭和12年当時の秋田を描いた幅20mの大壁画「秋田の行事」。螺旋階段、開放感あふれるラウンジなどの見どころも。©Photo by Shigeo Ogawa

②**あきた文化産業施設松下**　旧割烹「松下」をリノベーションした荘厳さと新しさが見事に融合した空間、秋田の銘酒や甘味を堪能。あきた舞妓がお出迎え。

③**土崎神明社祭の曳山行事**　ユネスコ無形文化遺産に登録された曳山行事。戻り曳山で奏でられるあいや節は、北前船により伝えられたハイヤ節が起源とされています。

④**地蔵院 虚空蔵尊堂**　日和山だったとされている場所で、石灯籠や百度石などが残ります。



# 北の京文化

「ほんまに酒田はよい港、繁盛じゃおまへんか」
目にも艶やかな京文化、運んできたのは北前船。

*Sakata-shi*

## 山形県 酒田市

江戸時代、「西回り航路」によって繁栄を極めた港町。酒田からは米以外にも出羽の紅花を積み、帰り荷は、その紅花で染めた京友禅やひな人形など、京の文化を運んできました。井原西鶴の『日本永代蔵』で「北の国一番の米商人」と描かれた鐙屋、自ら北前船交易に乗り出して日本一の大地主になった本間家などの屋敷が現存する酒田には、上方文化の雅な風情が今も色濃く残ります。

「舞娘茶屋　雛蔵畫廊　相馬楼」は酒田で江戸時代から続いた料亭「相馬屋」を修復、1階は20畳の「茶屋くつろぎ処」、2階の大広間は舞娘さんの踊りとお食事を楽しめる演舞場。酒田で「舞妓」を「舞娘」と呼ぶのは、宴席での「芸」だけでなく「その場を華やかにする舞う娘」という意味も込められています。壁から市松模様状の畳まで、紅色に染められた大広間に響き渡る艶やかな歌声と三味線の音色。雅やかな舞い姿に心まで紅色に染められて。江戸時代から大切に守られてきた酒田の伝統が、今も目の前でいきいきと舞うたびに、見る者の心も舞い上がるのです。

①**庄内刺し子**　日本三大刺し子のひとつ。藍染の木綿布に白い木綿糸で差し込まれる、緻密で可愛らしい紋様は、丁寧な手仕事ならではのぬくもりを感じさせます。

②**ケルン**　カクテル「雪国」が生まれたこちらのお店は、昼は喫茶店、夜はバーとして営業。レシピを考案したマスター自らが振ってくれるシェーカー姿をぜひ。

③**傘福**　山形県酒田市周辺で飾られるつるし飾り。北前船によって伝えられたものと考えられている

④**日和山公園**　寄港地には欠かせない方角石や日本最古級の木造灯台、千石船があり、往時の名残りを忍ばせています。（写真提供：酒田観光物産協会）

## 日和山でカフェ

日和山からコーヒー片手に沖ながむれば
船の帰りを待ちわびる、娘の身にならしゃんせ。

*Niigata-shi*

# 新潟県 新潟市

２０１９年1月に開港１５０周年を迎える新潟港は、日本海を行く北前船などの回船や川舟が集まる町として栄えました。港に通じる小路が随所に延び、通りには広大な商家や船主の屋敷が建ち並びます。京など遠方が運んだ文化の影響も残り、民謡「佐渡おけさ」もその一つ。北前船はこの地にたくさんの富と繁栄をもたらしました。

江戸時代、信濃川河口の港を見渡す砂丘の丘で、新潟の町で一番の高台だった日和山。この山はかつて水先案内の地であった、新潟市を代表する史跡スポットです。標高12.3メートルの山の中腹（五合目）にあるのが、黒塀と白壁のコントラストが印象的な「日和山五合目」。こちらでは、コーヒー好きな店主のこだわりが詰まった「日和山ブレンド」とスイーツが楽しめます。特注もなかの皮に牛乳ベースの手作りアイスが詰まった「日和山方角石 アイスもなか」はイチオシ。冬は、自家製の厚切り食パンの中に、発酵バターで作ったホワイトソースのグラタントーストでほっこり、あったまって。

①**ネルソンの庭**　旧新潟県副知事公舎をリノベーションした、美しいレストラン。地元産の食材をいかしたイタリアンが食べられます。

②**ぬったりテラス商店街**　昔ながらのレトロな雰囲気が残る商店街に、雑貨、パン屋、カフェ、看板ネコちゃんがいるオフィスなど、女子のハートをくすぐるショップが並びます。

③**古町糀製造所**　銀座でおむすび屋を営んでいた店主が、新潟の味噌蔵や酒蔵を訪ねるうち、「糀」の魅力にはまってオープン。糀甘酒や糀スイーツなど発酵好きにはたまらないお店。

④**旧齊藤家別邸**　新潟の砂丘地形を活かした回遊式庭園と、屋敷が一体となったこちらの邸宅は、手すりや床の間の棚など細部までこだわったモダンな造り。

## 長寿伝説の宿

器量良し、気立て良しの美魔女「八百比丘尼（やおびくに）」。
伝説の地で、永遠の美と若さを授かりましょう。

*Nagaoka-shi*

# 新潟県 長岡市

江戸時代の寺泊は、海上交通の要として栄え、本州から最短距で佐渡島に渡れる地としても知られました。北前船がもたらした富により、多くの人々が暮らし、海沿いには集落が作られました。寺泊はその名の示す通り、由緒ある多くの寺が建ち、古い歴史と美しい自然が調和する「日本海の鎌倉」とも呼ばれており、小路が入り組んだ独特の町並みが特徴です。

遠浅の寺泊野積海水浴場まで5分の好立地にある茅葺きのお宿「まつや」。食事処のダイニングは梁を張り巡らせた天井、囲炉裏が残り、ノスタルジックな古民家の雰囲気が味わえます。こちらでは新潟名物の漁師鍋「番屋鍋」をぜひ。この野積の地は、長寿伝説「八百比丘尼（やおびくに）」伝説で知られ、禁断の人魚の肉を食べて８００歳まで生きたとされる尼さんの伝説が残ります。器量良しで気立ても優しく、30回も嫁入りしたという「八百比丘尼」。その容貌は５００歳で出家した際も、17歳の時のままの美しい娘だったそうです。

①②**和島トゥー・ル・モンド**　築85年の廃校になった小学校を活用した完全予約制の「Bague（バーグ）」は、この地で採れる旬の食材を使った五感で楽しむフレンチ。ワインに合うパン屋も併設。最も食べ頃の時に、農家さんが収穫した野菜の美味しさは感動もの。舌をうならせる一皿は、生産者、シェフ、サービス、すべての技が一体となった「本物の物語」から生まれます。

③④**白山媛神社**　収蔵された五十二枚の船絵馬は、北前船の歴史を知る貴重な資料。船の構造、乗組員などが描かれ、奉納の時期や奉納者が記されています。

# パワースポット氣比神宮

引いた恋みくじは、「縁結び桜」に結いましょう。
春になったら、恋のひと花、咲かせましょう。

*Tsuruga-shi*

## 福井県 敦賀市

古来より、富の集まる町だった敦賀。海外に対する朝廷の窓口であり、中国船が交易品を満載して訪れました。芥川龍之介の有名な小説「芋粥」の舞台はここ敦賀。江戸時代になると、北陸や東北の物資を都に輸送する中継港として大いに繁栄しました。その後、西回り航路が整備すると蝦夷地（北海道）との交易品が急増。特にニシンは輸送量が増えていきました。

北陸道の総鎮守である氣比神宮。関東総鎮守が箱根神社と聞けば、「北陸の気比」の偉大さが分かるでしょう。高さ11mの大鳥居は春日大社（奈良）、厳島神社（広島）と並ぶ日本三大木造大鳥居のひとつ。7柱のご祭神をまつり、開運や長寿、食など様々なご利益があるパワースポットとしても有名です。松尾芭蕉も「奥の細道」の旅の途中で立ち寄り、句を詠みました。参拝の際は、恋みくじもお忘れなく。おみくじを引いたら、外拝殿に鎮座します縁結び桜に願いを込めてそっと結びましょう。そして、桜が開花する頃には、恋のひと花を咲かせましょう。

**①敦賀赤レンガ倉庫**　1905年、外国人技師の設計により建築された港町敦賀を象徴する建築物のひとつ。鉄道と港のジオラマ館、レストランも併設。

**②キトテノワ**「丁寧な暮らしと食」をテーマに、野菜と発酵食にこだわったカフェ。苺とブリュレのパフェ、ワッフルなどのスイーツも。

**③旧大和田銀行本店**　昭和2年に北前船主 大和田荘七によって建てられた洋風建築。室内には大理石をふんだんに使い、北陸初のエレベーターも設置。現在は敦賀市立博物館として公開されています。

**④ liir**　敦賀市のガラス作家・森谷和輝さんによるアクセサリーやカトラリーは。その美しい気泡や厚みのコントラストに目を奪われます。



# 一般公開されている北前船関連施設

**【北海道】**
**小樽市総合博物館**＝小樽市手宮
☎ 0134・33・2523
**小樽市総合博物館・運河館**＝小樽市色内
☎ 0134・22・1258
**鰊御殿「旧田中家番屋」**＝小樽市祝津
☎ 0134・22・1038 ＝冬季休館
**よいち水産博物館・余市町歴史民俗資料館**＝余市郡余市町
☎ 0135・22・6187 ＝月曜休館
**旧余市福原漁場**＝余市郡余市町
☎ 0135・22・5600 ＝月曜休館
**八雲町熊石歴史記念館**＝八雲町熊石平町
☎ 01398・2・2200 ＝月曜休館
**旧中村家住宅**＝檜山郡江差町
☎ 0139・52・1617 ＝冬季のみ月曜休館
**旧檜山爾志郡役所**（江差町郷土資料館）＝檜山郡江差町
☎ 0139・54・2188 ＝冬季のみ月曜休館
**横山家**＝檜山郡江差町
☎ 0139・52・0018 ＝冬季は要予約
**松前城資料館**＝松浦郡松前町
☎ 0139・42・2216 ＝冬季休館
**松前藩屋敷**＝松浦郡松前町
☎ 0139・43・2439 ＝冬季休館
**箱館高田屋嘉兵衛資料館**＝函館市末広町
☎ 0138・27・5226 ＝木曜休館

**【青森県】**
**佐井村海峡ミュージアム**＝下北郡佐井村（連絡先は観光協会）
☎ 0175・38・4515 ＝月曜休館
**野辺地町立歴史民俗資料館**＝上北郡野辺地町
☎ 0175・64・9494 ＝月曜休館
**市浦歴史民俗資料館**＝五所川原市十三土佐
☎ 0173・62・2775
**円覚寺寺宝館**＝西津軽郡深浦町
☎ 0173・74・2029
**深浦町「風待ち館」**＝西津軽郡深浦町
☎ 0173・74・3553

**【秋田県】**
**本荘郷土資料館**＝由利本荘市石脇
☎ 0184・24・3570
**象潟郷土資料館**＝にかほ市象潟町
☎ 0184・43・2005 ＝月曜休館
**仁賀保勤労青少年ホーム**＝にかほ市平沢
☎ 0184・35・4711 ＝月曜休館

**【山形県】**
**旧青山本邸**＝飽海郡遊佐町比子青塚
☎ 0234・75・3145 ＝月曜休館
**旧鎧屋**＝酒田市中町
☎ 0234・22・5001 ＝冬季のみ月曜休館
**酒田市立資料館**＝酒田市一番町
☎ 0234・24・6544 ＝冬季のみ月曜休館
**本間家旧本邸**＝酒田市二番町
☎ 0234・22・3562 ＝ 12月中旬～1月下旬休邸
**致道博物館**＝鶴岡市家中新町
☎ 0235・22・1199 ＝冬季のみ水曜休館

**【新潟県】**
**相川技能伝承展示館**＝佐渡市相川坂下町
☎ 0259・74・4313
**小木海運資料館**＝佐渡市小木町
☎ 0259・86・3191
**佐渡国小木民俗博物館・白山丸展示館**＝佐渡市宿根木
☎ 0259・86・2604
**胎内市文化財収蔵庫**＝胎内市桃崎浜（連絡先は胎内市学校教育課）
☎ 0254・43・6111 ＝要予約
**金刀比羅神社奉納模型和船収蔵庫**＝新潟市中央区西蒲島町
☎ 025・223・3573 ＝要予約
**新潟県立自然科学館**＝新潟市中央区女池南
☎ 025・283・3331
**新潟市歴史博物館みなとぴあ**＝新潟市中央区柳島町
☎ 025・225・6111 ＝月曜・祝日の翌日・年末年始休館
**白山媛神社船絵馬収蔵庫**＝長岡市二ノ関町
☎ 0258・75・3412 ＝要予約
**越後出雲崎天領の里**＝三島郡出雲崎町尼瀬
☎0258・78・4000 ＝第1水曜休館
**能生白山神社宝物殿**＝糸魚川市能生
☎ 025・566・3465 ＝ 1週間前に要予約
**マリンミュージアム海洋**＝糸魚川市能生小泊
☎ 025・566・3456 ＝冬季休館

**【富山県】**
**北前船回船問屋「森家」**＝富山市岩瀬大町
☎ 076・437・8960 ＝月曜休館
**水橋郷土資料館**＝富山市水橋舘町
☎ 076・479・0081 ＝月曜休館
**新湊博物館**＝射水市鏡宮
☎ 0766・83・0800 ＝火曜休館
**大楽寺**＝射水市立町
☎ 0766・82・3016 ＝要予約
**高岡市伏木北前船資料館（旧秋元家）**＝高岡市伏木古口
☎ 0766・44・3999 ＝火曜休館
**高岡市万葉歴史館**＝高岡市伏木一宮
☎ 0766・44・5511 ＝火曜休館

**【石川県】**
**旧角海家住宅**＝輪島市門前町黒島町
☎ 0768・43・1135 ＝月曜休館
**上時国家**＝輪島市町野町南時国
☎ 0768・32・0171
**輪島市黒島天領北前船資料館**＝輪島市門前町黒島町
☎ 0768・43・1193 ＝月曜休館
**石川県銭屋五兵衛記念館**＝金沢市金石本町
☎ 076・267・7744 ＝冬季のみ火曜休館
**石川県立歴史博物館**＝金沢市出羽町
☎ 076・262・3236
**大野からくり記念館**＝金沢市大野町
☎ 076・266・1311 ＝水曜休館
**武家屋敷跡加賀藩千二百石野村家**＝金沢市長町
☎ 076・221・3553
**呉竹文庫**＝白山市湊町
☎ 076・278・6252 ＝月曜休館
**小松市立博物館**＝小松市丸の内公園町
☎ 0761・22・0714 ＝月曜休館
**北前船主屋敷・蔵六園**＝加賀市橋立町
☎ 0761・75・2003
**北前船の里資料館**＝加賀市橋立町
☎ 0761・75・1250

**【福井県】**
**みくに龍翔館**＝坂井市三国町緑ヶ丘
☎ 0776・82・5666 ＝水曜休館
**大野市歴史博物館**＝大野市天神町
☎ 0779・65・5520
**福井県陶芸館**＝越前町小曽原
☎ 0778・32・2174 ＝月曜休館
**北前船主の館・右近家**＝南越前町河野
☎ 0778・48・2196 ＝水曜休館
**敦賀市立博物館**＝敦賀市相生町
☎ 0770-25-7033 ＝月曜休館
**みなとつるが山車会館**＝敦賀市相生町
☎ 0770-21-5570 ＝月曜休館
**ヤマトタカハシ敦賀昆布館**＝敦賀市坂の下小河田
☎ 0770・24・3070
**福井県立若狭歴史博物館**＝小浜市遠敷
☎ 0770・56・0525 ＝月曜休館

著者：加藤貞仁　著作：北前船日本遺産推進協議会　協力：一般社団法人　北前船交流拡大機構
企画：（株）東映エージェンシー　編集・デザイン：EXAPIECO INC.　印刷製本：三映印刷株式会社

北海道函館市

北海道松前町

青森県鰺ヶ沢町

青森県深浦町

秋田県秋田市

山形県酒田市

新潟県新潟市

新潟県長岡市

石川県加賀市

福井県南越前町

福井県敦賀市

Kitamae-bune

北前船寄港地・船主集落

11

www.kitamae-bune.com